



074374-000-3

特65-147

ちゃんちゃん征伐当世流行節

[出版事項不明]

CEI-1626



ちんく 當世流行節
征伐

○當世流行減茶く節



○ちんくは弱い癖に餘ッやと向ふ見ず負てもく吞
湖のしやアで出来る減茶めちやチャカラカチヤンく

○支那の分捕品は餘ッやと訝おもの錆た鎗やらさたない
旗の何れも彼も減茶めちやチャカラカチヤンく

○ちんくは火將は餘ッやと臆病もの恥をさらすも平
氣なす時を逃は出す減茶めちやチャカラカチヤンく

○山はももせや餘ッやと強情だ又た平壤にコロリと



負て駈け出す滅茶めちやチヤカラカチヤン〜

○支那海軍士官は餘ッ不ど屁暮な奴未熟の腕前餘儀ない

チウて七八艘もブ〜チヤカラカチヤン〜

○支那の甲鉄艦は餘ッ不ど脆いもの日本の大砲食ッたチ

ウて直に沈む滅茶めちやチヤカラカチヤン〜

○豊島にこりもせず餘ッ不ど馬鹿な支那軍艦七艘送運船

まで黄海で滅茶めちやチヤカラカチヤン〜

○平壤の分捕品は餘ッ不ど儲けもの金銀米穀澤山チウて

擔ぎ來る滅茶めちやチヤカラカチヤン〜

○支那の兵隊どのは餘ッ不ど駄目の皮殺されては溜らん

チウて直ぐ逃る滅茶めちやチヤカラカチヤン

○日本の軍艦は餘ッばど大丈夫まける支那艦のがすなチ
ウて追ッかける滅茶めちやチヤカラカチヤン

○朝鮮の東學党は餘ッばど乱暴だ官軍相手に負けあいチ
ウて押し出す滅茶めちやチヤカラカチヤン

○支那は野蠻國餘ッばど分らない政治もなんにも届かぬ
チウて理も非も滅茶めちやチヤカラカチヤン

○支那の新聞紙は餘ッばど無茶苦茶だイクラ負ても負け
ないチウて嘘を書く滅茶めちやチヤカラカチヤン

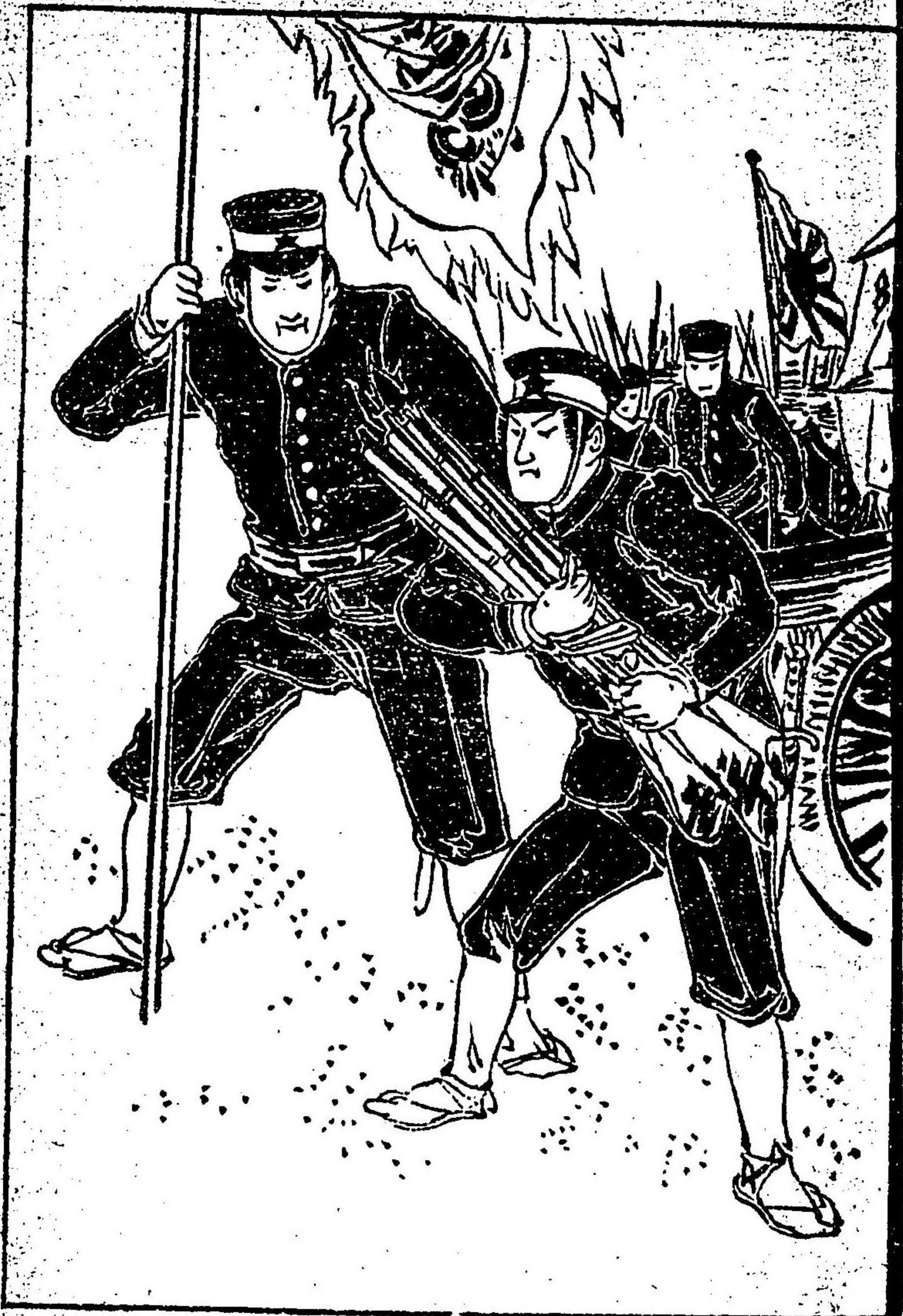
○日本の陸軍海軍餘ッばどさついの支那を退治にや置
ないチウて攻め立る滅茶めちやチヤカラカチヤン

○捕虜のちやん坊主は餘ッばど面白い繩もなんにも
入らないチウて天窓をフン縛るチヤカラカチヤン

○清兵の堡壘は餘ッばど弱い出來所詮これでは叶はんチ
ウて榴散彈で滅茶めちやチヤカラカチヤン

○平壤を堅めた支那兵餘ッばど弱い奴鉄砲打たれちや溜
らんチウて陣立も滅茶めちやチヤカラカチヤン

○支那の捕虜のちやん餘ッばど意句地なし命ばかり
はお助けチウて泣き出す滅茶めちやチヤカラカチヤン



○支那の軍の仕方は餘ッらずと下手なもの折角かためた平壤までも乗取られる滅茶めちやチヤカラカチヤン〜

○日本兵進軍の歌

進めよ〜皆進め
敵とは云どちやん〜は
頭の数は多けれど
豚尾頭を打手切り
何の容赦に及ぶべき

先を争ひ進めよや
皆な弱虫ばかりなり
蛆虫同様の奴なるぞ
並べ立るも面白し
滅多矢鱈に切まくれ

○其二

進めよく皆進め
無禮極まる彼の豚尾
如何に馬鹿とは云ながら
之を打捨て置く時は
不便なれども是非がない

○其三

進めよく皆進め
野蠻極まる國あるに
日本に對して寇を爲す
以後の懲しめ飽までも

逸足早く進めよや
向ふ見ずにも程がある
日本に手向ふ不埒者
却て日本の恥辱あり
片ツ端から打のめせ

人より先に進めよや
乞食同様の奴なるに
ちやんく坊主の面悪さ
ドシく敵地へ繰込んで

李鴻章までフン縛り

日本の腕前見せるべし

○其四

進めよく皆進め
ちやんく坊主は大國と
大將始め兵卒も
陸の戦争もコロリ負け
尙も降参せぬからは

飽までドシく進めよや
自分免許で威張ども
皆な腰抜けばかりあり
海の戦争もコロリ負け
打べしく打拂へ

○其五

進めよく皆進め
豊島成歡又た牙山

人に後れず進めよや
平壤及び黄海に

チヨ切きりた首くびは何なん万人ばんにん
夫それでもちやんくまた懲懲す
來きたれや來きたれいざ來きたれ

沈しづんだ軍艦ぐんかん何なん十艘じゅうさう
日本にほんに勝氣かつきか馬鹿ばか鹿かな奴やつ
日本にほん男兒だんじの腕うでを見みよ

○しんぱん一ツとせぶし

一ツトセ 四海しかいおさまる太平たいへいに、

二ツトセ 俄いつぱにおこる大だいじけん人の眠ねむむりをさまします
ふかき思おもをたへしのび

三ツトセ 日本にほんに渡る金玉きんぎょく均ひと國家こくがのためにはせひもあく
ささがさならぬこまでも

四ツトセ 跡あとへは引ぬ日本國にっぽんこくやまどたましひ見せつける
支那しなのくにではりこうしよう軍ぐんに負またら

五ツトセ こりやどうしようよはひほうではろふ大將たいしやう
こめんくといふ迄いたは

六ツトセ 日本刀にっぽんたちの切きあじを見みせてやらねばさがすまぬ
むりなせいじにこくみんは

七ツトセ 恨うらみのまなじり血ちの涙なみだむねもはりさく思おもなり
なんのくもなくしん國くにのぐんかん

八ツトセ たちまうちしづめさてもこきびのよいとよ
ようくおさまる朝あせんもにはん

せいじに改革すこくみんやふやくめんとする
九ツトセ こゝにてがらをあらわして

操江號をば奪とるさてもゆふさのかいぐんよ
十トセ といろきわたる砲聲の

なかを進し日本せいれをろきわしるしなの兵
十一トセ いまは日本のぐんじんも

こゝぞ御國のためなりと勇むいくさの大勝利
十二トセ にぐるひきやうのチャンくは

一人あまさず塵またくうちにやぶられる

〇功名節

万代に譽は朽ぬ松崎大尉

韓の依頼を引受けて

朝鮮國の獨立を

少將ならぬ大任を

花の京城を後に見て

頃は文月の五々の日が

華氏は百度を昇降し

草木爲に枯凋なす

人馬の疲勞容易ならず

牙山の清兵一掃し

保たしめんと大島が

帯びて兵士を率をつ

「進發なせし勇ましき

炎熱殊に著るるく

地盤龜裂し砂深く

「あつさは身を烘く斗にて

されど勇みに勇みたる

忠勇無双の我兵は
 はるけき道を厭ななく
 「素沙場にこそ着にける
 翌日九日の眞夜中の
 敵壘抜かんとて部署なし
 その先陣は誰なるぞ
 「松崎太尉其人ぞ
 星の光りに見渡せば
 迤か彼方の森はやし
 砲壘數多築き立て

毫も屈する氣色なく
 廿八日眞晝過ぎ
 其日は其處に露營なし
 闇に乗ぎて成歡の
 枚を銜みて攻寄る
 中隊長に名も高き
 敵の陣營如何にぞと
 闇にて確固と分らぬと
 繁茂を楯に丘の上
 三角状の旗標

「風に翻翻翻る
 只一打に打破れ
 進みし處は名にしれふ
 昨日の雨に水増して
 折ふし渡るに舟もかく
 流石に猛き直臣も
 撓まば兵氣挫けん
 譬へ水勢激しくも
 「徒渉るに難き事やある
 命惜しみて何かせん

是が目的の敵なるぞ
 破れくと下知あして
 要害無双の安城渡
 激流滔々凄じく
 橋は撤して影もなし
 「少時思案に吳竹の
 聲を勵まし云けらく
 高の知れたる此小川
 人生僅か五十年
 惜きは死後の名にあらめ

汝も日本兵士なら
 中にザンプと飛入りぬ
 互に扶け助け合ひ
 堤にありし伏兵が
 飛來る彈丸は雨あられ
 大尉下知して兵士等は
 ころを計りて松崎が
 兵士等奮然蹶起なし
 近付かれては敵はしど
 大尉太股射貫さしが

我に續けて云ふ浪の
 兵士も今は猶豫せず
 辛くも渡る折もなれ
 「一度に發砲つ釣瓶切り
 面を向くべき様もなし
 匍匐をつし進みしが
 吶喊進めの號令に
 銃劍執て突掛る
 烈しく打出す彈丸は
 毫も屈せず泰然と

軍刀振りて指揮をなす
 又も飛來る一丸に
 一聲高く殘念と
 最後を茲に遂にける
 大尉の敵遁さぞと
 要害堅固の成歡も
 「雲を霞と逃行を
 占領なして全軍が
 「天地も崩るし斗りなり
 未だ北京の城頭に

いと勇ましき折も折
 大尉は胸部打貫れ
 「叫ぶがあわれ世の名殘
 兵士等一同切齒をし
 猛り立たる勢に
 明くる三十日の東雲の
 追て牙山の根據をば
 ドット揚げたる勝聲は
 汗惜哉松崎氏
 我が日の丸の旗を見せ

あの世の旅に赴きし
 されど立てたる功績は
 「青史に永く傳らん
 「雨霞雪や氷と名ころは變れ
 落れは同じ谷川の
 火燄の中も何のろの
 國の爲とて大丈夫が
 歩兵砲兵騎兵隊
 衛生隊と各々が
 落つる處は皆一ツ

心の内は如何あらん
 先登一と万代の
 功名ヂヤ功名せ
 水底とて何のろの
 いといはせしな君の爲
 盡すまこと赤忠の
 或は工兵音楽隊
 「職は互に異なれど
 敵を仆すか目的ぞ

賊を降すが本望ぞ
 砲聲轟々百雷の
 前に進みし喇叭手が
 「喇叭の音ぞ勇ましき
 胸部ひしと打貫かれ
 「喇叭のふさより猶紅し
 楽譜乱れず吹奏す
 其名も清き源次郎
 されど體力限りあり
 細りくたぬぐに

劍花閃々稲妻歟
 「落て流るゝ安城渡
 啾唳吹出す進撃譜
 折しも飛來る一丸に
 進る血潮は手に持てる
 されさ屈せず整々と
 斯る勇者は誰なるぞ
 「白神氏とぞ知られける
 聲も次第に枯柳の
 聞えつ止みつあつばれの

若木の花も成歡の
堅く喇叭を其口に
死しても職を忘れざる

夜部の嵐に散行けど
銜みし様は眞に是れ
「忠義は普く傳らん
功名ヂヤ功名せ

「雨と降り霞とたばしる敵の矢玉

翳す劔は秋の野の
退くな去らなじ破られな
必死を盡す平壤城
待みて防ぐ支那兵
されど味方は千早振る

薄の如く入乱れ
破らんものと敵味方
流石名に負ふ天險を
「容易く抜くべう様もかし
神の助の有るでふ

